生きる希望、つなぐ未来

菊池恵楓園入所者自治会
会長　志村　康さん

▼プロフィール

佐賀県出身。14歳でハンセン病を発症し菊池恵楓園に入所。29歳で完治し32歳で社会復帰。現在は全国各地で講演など啓発や人権回復活動に取り組む。

菊池恵楓園には入所者でつくる自治会があります。ハンセン病問題の啓発活動や人権回復運動に取り組んでいます。

自治会で会長を務める志村康さんと副会長の太田明さんに話を伺いました。

生きる希望を見出す

らい予防法などにより、間違った認識で強制隔離されたハンセン病患者。差別や偏見は根強く激しいものでした。専用の薬での治療も入所者を苦しめました。「薬を使用すると体力を激しく消耗します。栄養のある食事はなかったし、薬が合わずに失明する人もいた。それで健康を保持できればよかったかもしれませんが、そうでなければ地獄でした」と唇をかむ太田さん。

しかし、入所者は苦しみながらも懸命に生きてきました。志村さんは入所者の自立した様子を振り返ります。「自治会で印刷所を持っていました。入所者は自分たちで文書を書いて活字にして製本までやって本を出していました」

重く、暗い歴史や差別問題があっても、明るさを探し求めていました。「最も変わったのは昭和40年代頃。車の免許を取るようになってからじゃないですかね」と太田さんは語ります。

当時、療養所外に出るには外出証明書が必要でした。さらに、公共交通機関で外出しようとすると、後遺症の残った姿を見て乗車拒否をされるなど差別を受けることもあり、入所者にとって遠くへ出掛けるのは困難なことでした。

車での外出ならば乗車拒否はなく、外出証明書も必要なかったため、入所者の行動範囲がぐんと広がりました。太田さんは当時を思い起こします。「古い車を買ってきて、自分たちでエンジンの整備をしながら乗っていました。生活に張りができて、療養所の雰囲気も変わりましたね。明るくなりました」

療養所内では野球場やバレーボールコート、テニスコートなども設けられ、スポーツが盛んに行なわれていました。「野球の自治会チームは強かったですよ。恵楓園の職員のチームにも、外部の病院や大学のチームにも負けませんでした」と懐かしむ志村さん。「カラオケや俳句、短歌、囲碁などの文化活動も盛んでしたね。絵、写真などは職員が指導してくれて、入所者と一緒になっていろいろ取り組んでいました」

得意なものや楽しみが、入所者の心を救っていきました。

▲昭和 30 年前後、療養所内で行なわれた運動会

菊池恵楓園入所者自治会
副会長 太田　明さん

▼プロフィール

熊本県出身。8歳で発病し菊池恵楓園に入所。いったん治療を終えたものの就職後に再発。痛みに耐えながらも治療を続け完治。現在は自治会で啓発活動に尽力。

伝えていくもの

療養所の中でも、文化活動やスポーツを通し前向きに生きた入所者の思いを太田さんは語ります。「そこには生きる喜びがあったと信じています。そうでなければ生きられません。入所者は人一倍、生きる喜びを求めていったのです」

そんな入所者の生きた足跡を見て取れるのが社会交流会館。さまざまな資料が展示されている会館は、現在、リニューアルを目指しています。「新しい会館には入所者が描いた油絵などを展示するギャラリーを作ろうと考えてます」と志村さん。「それは人間が確かに生きた証です」

会館の来訪者に伝えたいのは、悲惨な過去だけではないと2人は言います。「やっぱり希望ですね。みんな、療養所で人間として前向きに生きてきた。訪れた人にも、希望を見出してもらえる会館にしたいですね」

自治会では園内の歴史的建造物の保存にも注力しています。「ハンセン病の歴史を通して人権を考える場所が社会交流会館と歴史的建造物。後世に伝えるために残さなければいけません」。そう話す太田さんの目には、決意が宿ります。

子どもたちがつないでいく未来

療養所内のかえでの森こども園には90人の園児が通っています。8月に行なわれた菊池恵楓園納涼盆踊り大会では、園児がダンスを披露。入所者とふれあいながら祭りを楽しみました。入所者の長寿を祝う会では園児が毎年ステージ発表を行ないます。こども園の運動会では自治会にも招待があるなど、園児と入所者が交流する環境にあります。「やっぱり子どもはいいですよね。私たちも元気付けられます」と志村さんは笑顔をにじませます。

令和3年4月には菊池医療刑務支所跡に新しい小学校と中学校が開校します。「医療刑務支所跡地が学校に生まれ変わるというのは、すごいことですよ」と話す2人。「子どもたちには、しっかりと人権について学んでほしい。手探りですが、子どもたちとどんな交流ができるか探していきたいですね」

子どもたちと入所者がふれあうことで、子どもたちは人権問題を身近に捉え深く学び、入所者はさらに元気や明るさをもらう。そんな希望に満ちた未来を2人は願っています。

▲納涼盆踊り大会でダンスを披露するかえでの森こども園の園児たち

希望の鐘

▲復元した鐘

▲当時の鐘

治療を終えた入所者が社会復帰をする際に鳴らしていたもので、1951年から60年前後に使用されていました。当時の鐘は社会交流会館に展示されています。

旧礼拝堂記念鐘楼（1995 年建設）

祈りの場、寄り合いの場所として利用された礼拝堂。台風で崩壊したため、その代わりに記念鐘楼が建設されました。年末年始には除夜の鐘として鳴り響いています。

納骨堂（1976 年建設）

旧納骨堂で雨漏りが起こったり、保管場所が足りなくなったりしたため、1976 年に建設されました。現在、約 1,300 柱を超える人たちの遺骨が安置されています。

納骨塔（旧納骨堂）（1939 年建設）

ドーム状で中は半地下形式の納骨堂が建設されました。患者自身の手で、亡くなった人の骨を安置していました。